

【研究ノート】

「博物館学」を遡る

The research of the earliest instance of "Hakubutsukan-gaku"

山本 哲也[※]

Tetsuya YAMAMOTO

はじめに

「博物館学」を名乗った初の文献は、一般に昭和25年(1950)の『博物館学綱要』と言われているのではないかと思われる。また、「博物館学」という用語が使われた最初が、その『博物館学綱要』という大いなる勘違いも、実はまだ多いのかもしれない^(註1)。

果たして「博物館学」という用語がいつ頃使われ始め、文献に登場する本当に最初のもは何であるのかということ、今のところ大正7年(1918)にまで遡ることが、米田耕司氏の指摘により判明している^(註2)。しかし、さらに以前に存在するかどうかについての追及は、今後も間違いなく続けなければならない。

このように用語の使用としての「博物館学」遡及の課題は残るのであるが、論文または書籍等文献のタイトルとしての「博物館学」の遡及もまた、一つの課題ではないかと思う。と言うのも、『博物館学綱要』よりも古い、「博物館学」を名乗る文献を見出すことができたからである。本稿はその文献の紹介とともに、「博物館学」の遡及の可能性を考えてみることにする。

1. 『新美術』第21~23号

時代は戦時中に遡る。

昭和18年(1943)発行の『新美術』4月号から6月号、通巻で第21号から第23号(写真1)に、洋画家の大森啓助^(註3)が3回に分けて博物館に関する文章を執筆しており、そのタイトルに「博物館学」が付されているのである。そしてこの文献こそ、これまで博物館学史上扱われることはなかったと思われるものなのである^(註4)。



写真1 左から『新美術』第21～23号

『新美術』というのは、春鳥会によって昭和16年9月10日の、太平洋戦争直前に創刊された月刊誌であった。体裁はB5判。その創刊号の末尾には、「創刊のことば」として大下正男が次の通り挨拶文を記している。(以下、漢字の旧字体は一部を除き新字体に直して記す)

「みづゑ」は八月号を以て廃刊、新に洋画専門誌として「新美術」が創刊されることになりました。

廃刊の経緯についてはここに詳しく記すことを避けますが、美術雑誌統制に関し七月八日内務当局より美術雑誌を洋画二、日本画二、通信二、総合一、季刊一の八種に限定許可する旨通達があり、(中略)

永年「みづゑ」を御支援下さいました寄稿家並に愛読者諸君に心から御礼を申上ます、と共に滄らざる御声援を「新美術」に賜ります様御願ひいたします。

このように、国の当局からの命により美術雑誌に統制がかけられて出来た雑誌であった。^(註5)

以上のような時勢の中で刊行された『新美術』において、大森啓助が「博物館学」に関する文章を執筆する機会を得たことになるのである。

さて、大森が執筆した3回のうち第1回・第2回と第3回のタイトルには、若干の差異がある。まずはそれらを列記して比較してみよう。

- 1) 4月号=第21号(昭和18年4月3日発行)
「ミウゼオグラフィー 一 —博物館學—」(17~26頁)
- 2) 5月号=第22号(昭和18年5月3日発行)
「ミウゼオグラフィー 二 —博物館學—」(24~31頁)
- 3) 6月号=第23号(昭和18年6月3日発行)
「ミウゼオグラフィ (三)」(22~30頁) (3回の合計27頁)

「ミウゼオグラフィー」にしろ、「ミウゼオグラフィ」にしろ、それがMuseographyであることは、容易に理解できよう。つまり、ここでは大森が言う「博物館学」とは、Museologyでは

ミ
ウ
ゼ
オ
グ
ラ
フ
イ
ー

— 博
物
館
学 —

大
森
啓
助

写真2
第1回タイトル写真

ないことを、理解することになるのである。

そして、写真2にも示した通りであるが、そこにはまさしく「博物館学」を見ることができるのである。第3回で「博物館学」の副題がはずされている理由はわからないが、第1・2回に気紛れに付されたものではないことは確かである（理由は後述）。

続いて、章立て全体を見てみる。なお、文献のタイトルでは、その回数表示において括弧無し（第1・2回）と括弧有り（第3回）となっているのと同様、章においても括弧無し（第1・2回）と括弧有り（第3回）は共通していることを明記しておく。また、節相当以下の詳細は後で触れる。

—はしがき—

- 一 博物館の起源
- 二 全世界における博物館の分布状態
- 三 フランスの博物館
- 四 博物館の発達
- 五 博物館の繁栄
- 六 博物館の設計
- 七 博物館の様式 (以上、第21号)
- 八 大博物館の活動
- 九 博物館の見せ方 (以上、第22号)
- (一〇) 博物館内の光線
- (一一) 博物館の装備
- (一二) 博物館の普及工作 (以上、第23号)

この12章にわたる章立てを見るだけでも、博物館の発達史、展示方法や設備はもちろん、経営面にも及んでいるのであり、所謂「博物館学」を説明しようとしていることがわかるのではないだろうか。

2. 各章の内容

次にそれぞれの章について、簡単に説明を加えながら、さらにこれが「博物館学」を目指したものであることを示してみたい。

(0) はしがき

序文である。そこにはまさに博物館学への意識が記されている。

I・I・C・I（国際文化連盟）が雑誌「ムウゼイオン」刊行に着手したのは一九二六年のことであった。

という書き出しに始まり、その後、次のように説明が加えられる。

文化人のあたらしい研究題目たるミウゼオグラフィーが、やうやく一個のサイエンスとしての形体をととのへるにいたつたわけであつた。故に、ミウゼオグラフィー……ここに謂ふ博物館学は、最もあたらしい学問の部に属するのではあるけれども、これがそもその誕生は、すでに雑誌「ムウゼイオン」刊行の、一九二六年にあつたとするのが至当であらう。

しかし博物館学は、いまや発育の途上にあるがゆゑに、まとまつた著述は殆んど見うけられないやうであり、ために、これが存在を知る人のすくないのはもちろん、博物館学といふ名称にさへ接した人の稀れなのは、至極尤もな次第と云わねばなるまい。

このように、まさしく博物館学というものに触れ、それがこれからの学問であることを知らしめようと試みる序文となっているのである。なお、そのきっかけについては、1937年のパリ万博において「博物館学館」なる施設^(註6)を見たからのものであることが記されている。

しかし、その後、

秃筆をかかへりみず、今ごろやつとこの一編を草するゆゑんは、(中略)一つには、わが日本にも、すみやかに博物館学の出現を希望したいがために他ならぬ。但し断つておくが、これは、私が眼で見た博物館学の単なる紹介であつて、正直なところ、わずか十フランで求めた当時のカタログと、貧しい心おぼえの手帖を基にして書き綴つたものに過ぎない。(後略)

と、謙虚な姿勢で述べようとしていることもわかる。

なお、ここで注意すべきは、博物館学の誕生を1926年、つまり大正末年か昭和初年としていることである。それをそのまま真実と受け入れられないのは、上述の米田氏の指摘からわかるのであるが、その認識に至る過程を探るのも課題の一つと言えるであろう。しかし、今となつては説明困難と思われる。

(1) 博物館の起源

最初に博物館の発達史をごく簡単に述べている。

紀元前のピナコテークから、中世の君主、貴族、宗門所蔵の宝物を保管する場所としての形成を説く。因みに、君主の例に正倉院を挙げている。中世末からは王侯コレクションとの関係、イタリア、フランス、イギリス、ドイツについて、博物館と王侯名を結んで挙げている。そして、18世紀の公的な博物館への移り変わりへとつなげている。

(2) 全世界における博物館の分布状態

「美術」「歴史」「科学技術」「混成」と分類しつつ、世界各国の博物館数を表に示して説明を加えている。しかし、大森本人も述べるように、発表年こそ1943年であるものの、資料自体は1927～1936年とやや古いものである。そういった条件下であるが、アメリカ合衆国の869館を最高に、フランス701館、ソ連693館、ドイツ644館、グレート・ブリテン及びアイルランド562館、イタリア453館が上位となり、あとは多くても100館台となる。日本は1932(昭和7)年調査で、美術18、歴史9、科学技術4、混成5の計36館となっている。同年、日本博物館協会から『全国

博物館案内』が発行されており、そこから算出したものである可能性はあるが、同書には動物園や商品陳列所のほかに、個人蒐集のコレクションなどのおよそ博物館とは言い難いものも含まれて200あまりの施設が掲載されている。そして、もし同書が参考にされたとしても、美術、歴史等の分類がどの館に相当するか、特定はなかなか難しい。あくまでも参考とされた可能性があることの指摘にとどめたい。

(3) フランスの博物館

ここで唐突にフランスの紹介が挿まれる。渡欧し、海外の博物館の中でも特にフランス視察の成果を意識的に込めたものと思われる。1792～1797年の間に国民議会在が博物館の基本的タイプを創りあげたと記し、さらに館種別はもちろん、政府、地方庁、都市、組合又は団体、個人という管理者別の割合を提示しているところは興味深い。

(4) 博物館の発達

第1章の内容を受けてか、18世紀以降、それも1751年以降の博物館数の増加傾向を国ごとに示してその後の発達の様子を示している。ヨーロッパにおいては歴史博物館と科学博物館の発達の様相の違いを記し、さらにヨーロッパやアメリカの数における発達史の比較なども簡略に記している。

(5) 博物館の繁栄

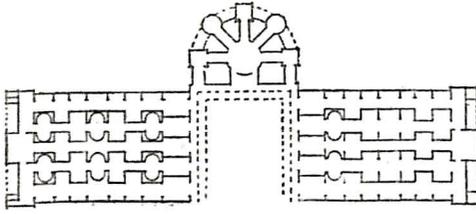
1935年の1年間における大英博物館など世界15大博物館の入場者数を、団体、個人、有料、無料に分けて示し、多くの入場者が得られていることを示している。最多はニューヨークのアメリカ自然史博物館で、計178.1万人である。ルーヴル美術館は28万人で、現在から見れば非常に少ない数となっている。スウェーデンのスカンセンも入っており、136.6万人という人気の程を知ることができる。

(6) 博物館の設計

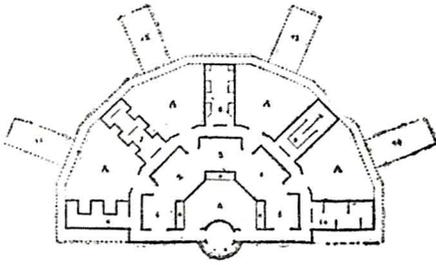
博物館建築における展示室の配置について、設計図(平面図)を示しつつ説明を加える(図1)。最初はミュンヘン新美術館、ミュンヘン彫刻陳列館、ウィーンのクンストヒストリツシエス・ムゼウム、ボストン美術博物館と実例を挙げて述べている。続いて、収蔵品の増加を原因に一般鑑賞用(主要室)と研究用の部屋(附属室)に分けるべき時代の到来を述べ、そのシステムはゲーテが最初に唱えたことなどを紹介。そして、「横列式ギャラリーの設計図」、「放射状副ギャラリーの設計図」、「二重ギャラリーの設計図」という3型式を示した後、最後に「美術館の設計図」、「科学・技術博物館の設計図」という分類の基に説明している。

(7) 博物館の様式

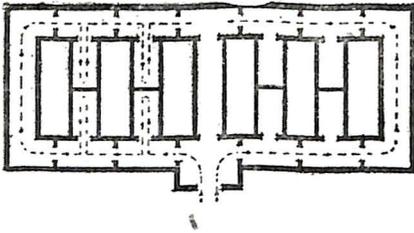
写真を示しながら、実例を基に博物館の建築様式を説明している。「古代風の建築」である「ブリテイシュ・ミュージアム」、鉄の飛躍時代(1850年)の金属を使用した建築としての「ヴィクトリア・エンド・アルバート・ミュージアム」、「歴史的建築物をそのまま博物館に充用する」19世紀の「ルーヴル博物館」、「近代風」に改造した20世紀の「ルーヴル博物館」、「豪華絢爛なる公共建築物」の「クンストヒストリツシエス・ムゼウム」、そして「華美なる装飾にたいする反動」



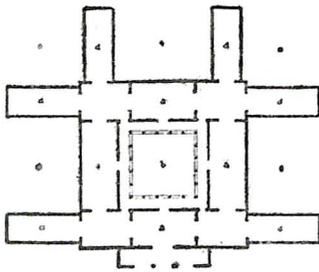
5



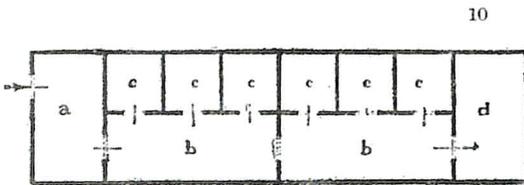
7



8



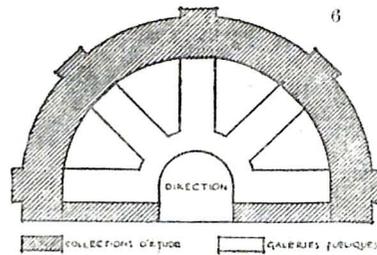
9



10

図1 博物館の設計図の例から
(配置は原本通り)

- 5. 横列式ギャラリーの設計図
- 6・7. 放射状副ギャラリーの設計図
- 8. 二重ギャラリーの設計図
- 9. 美術館の設計図
- 10. 科学・技術博物館の設計図



6

から「単純化合理化」した例としての「ハートフォード博物館」という6様式を挙げている。

(8) 大博物館の活動

その題の通り、大博物館における館内外での活動の様相を、「その一 内部における活動」と「その二 外部における活動」に分けて述べている。

その一では「ルーヴル博物館絵画部」を例に、「1 購買課」、「2 実験室」、「3 蔵品目録作成」、「4 作品の納まり場所」、「5 保全と修復」、「6 普及部の仕事」という部署ごとに説明している。1はすなわち資料購入部署であり、2はX線等の科学的実験を行う部署のことを言っている。3は収蔵品管理の基本事項を司るものであり、4は収蔵庫に関するものであるところから、資料の登録と管理を行うということになる。さらに5には、資料の保存に関することや修復技術者の存在を示しており、組織としての充実ぶりが読み取れる。6では売店、すなわちミュージアムショップに関することや、講演会などの「口述による普及工作」にも触れている。

その二では、人類学博物館を例に、各地との連携や出版と出版物の交換、広報などを簡略に述べている。

(9) 博物館の見せ方

「その一、特殊博物館の例」と「その二、普通博物館の例」に分け、それぞれ模型写真を提示しながら説明しているところが非常に特徴的である。模型写真はすべてがそうであるのかわからないが、パリ万博の「博物館学館」における模型写真が利用されているようである。内容は主に展示法を説明するものであるが、時には講演などの所謂普及事業も含めるものもある。なお、何をもって特殊と普通に分けているのかは明らかではないが、以下の通り、細分される。

その一、特殊博物館の例

- 1、ミウゼ・デユ・テロアール Musee du Terroir
- 2、児童博物館
- 3、動物園
- 4、野外博物館

その二、普通博物館の例

- 1、昔のコレクション
- 2、昔の博物館
- 3、混合陳列法
- 4、旧時代の再建
- 5、想像による旧時代再建
- 6、技巧の分割
- 7、無装飾の陳列
- 8、傑作品を孤立せしめたる陳列
- 9、建築博物館
- 10、ソ連の複合博物館

-
- 11、歴史博物館
 - 12、近代風歴史博物館
 - 13、科学博物館（ロンドンの地質学博物館）
 - 14、同（人類学博物館）

これら一つ一つを詳細に解説するにはそれなりに紙数が必要となるので、ここでは5点ほど挙げていくのみとする。

その一の1の「ミウゼ・デユ・テロアール」は、「適当な邦訳が見つからない」といいながら、「ミウゼ・ロカール（地方博物館）」とは区別するものの、差異をもたぬようになってきたことを記し、地方博物館の範疇に含めたいような意識も感じる。また、「歴史的記念物、民族史や風土史の要素たるべきもの、その他、その地方の社会的経済的進化を説明する」と記していることから、敢えて言うなら郷土博物館であるだろう。その二の3の「混合陳列法」は「同時代の絵画・彫刻・家具の類を、同時代のスタイルを有する部屋に混ぜこぜに陳列」するものであり、4の「旧時代の再建」とともに組合せ展示になるが、所謂時代室^(註7)としては後者が相当するものであろう。6の「技巧の分割」は、芸術品を時代性による懐古趣味での展示に陥らせるのではなく、その特技特質で分割すべきことを述べる。また、8の「傑作品を孤立せしめたる陳列」というように、「象徴展示」または「単体展示」^(註8)とは違った表現法にも興味が引かれるところである。

(10) 博物館内の光線

ここに至って突然のように、章内を微に入り細に入りという状態で、細分しながら記す内容となっている。以下、その細分した節・項等を示す。

その一 照明

A 自然照明

- (一) 基本型
- (二) 一定方向に向けられた照明
- (三) 方向性を与へた照明の改良

B 人工照明

- (一) 基本型
- (二) 間接照明の矯正
- (三) 直接照明の矯正
- (附) 特殊な照明をほどこしたるガラス戸棚
 - 一、垂直照明を有するガラス戸棚
 - 二、半透明のガラス戸棚

その二 絵画にたいする科学的実験

- (一) 自然光による実験
 - a、拡大によつて
 - b、掃射光によつて

(二) 紫外線による実験

(三) X線による実験

詳述は避けるが、章題が示す通りの展示照明に関するものと思いきや、その二では科学的な方法を用いた絵画の解明に関する内容を含めている。例えば、レンブラントの絵画を普通写真とX線写真で確認した状態をそれぞれ提示し、下絵の存在を明らかにして科学的な方法の有効性を述べている(写真3)。なお、その一は照明の問題を説くもので、細部を見ればわかるとおり、章題からおおよそ判断される内容に一致するものとなっている。

(11) 博物館の装備

本章も、細分して説明を加えている。これもまず節・項以下の詳細を記す。

その一 整頓

- a 二重扉を有する衝立
- b 変形させ得る博物館

その二 素描と版画の見せ方

- a、溝つきの箱
- b、取りはづし自在な枠を有する戸棚

その三 絵画の見せ方

- A、背景と額縁の装ひ
- B、アクロツシヤージュ(絵画をつるすこと)

その四 床の装備

その五 科学的な見せ方

- A、回転支柱を装置したガラス箱
- B、顕微鏡
- C、移動式拡大鏡を有するガラス箱

その六 保護方法

- 一、火災予防
 - A、自動火災報知器
 - B、消防装置

その七 盗難予防

その八 ガラス箱

- 一、心棒をつかつて組立てたガラス箱
- 二、二重の防水装置を施したガラス箱
- 三、栈無しのガラス箱
- 四、上下、側面を全部ガラスを以てしたる箱
- 五、反射せざるガラス箱

その一は衝立やパーテーションで展示室内に工夫を

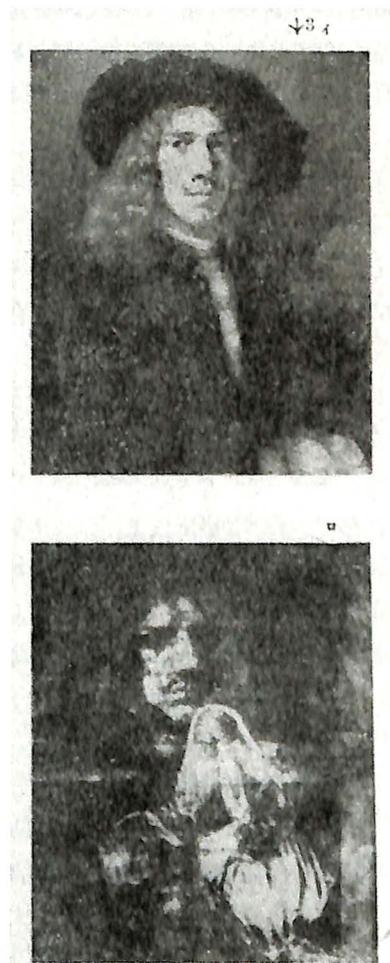


写真3
X線写真による絵画に対する実験例

凝らす仕掛けを紹介するものである。その二・その三は作品の展示に関する設備、方法を説明するもので、その四は床の仕上げとして、見た目が周囲と調和し、博物館疲労を感じさせない材質にも言及している。その五は「科学的」という言い方ではあるが、拡大鏡や顕微鏡などでの展示を紹介する程度である。その六・その七は防災・盗難対策に関する内容で、本章内に入るのはわかるものの、前後関係からはややその挿入位置が気になるところである。そして最後のその八は、展示のためのガラスケースについて防塵や反射光に対応したものなどを紹介している。

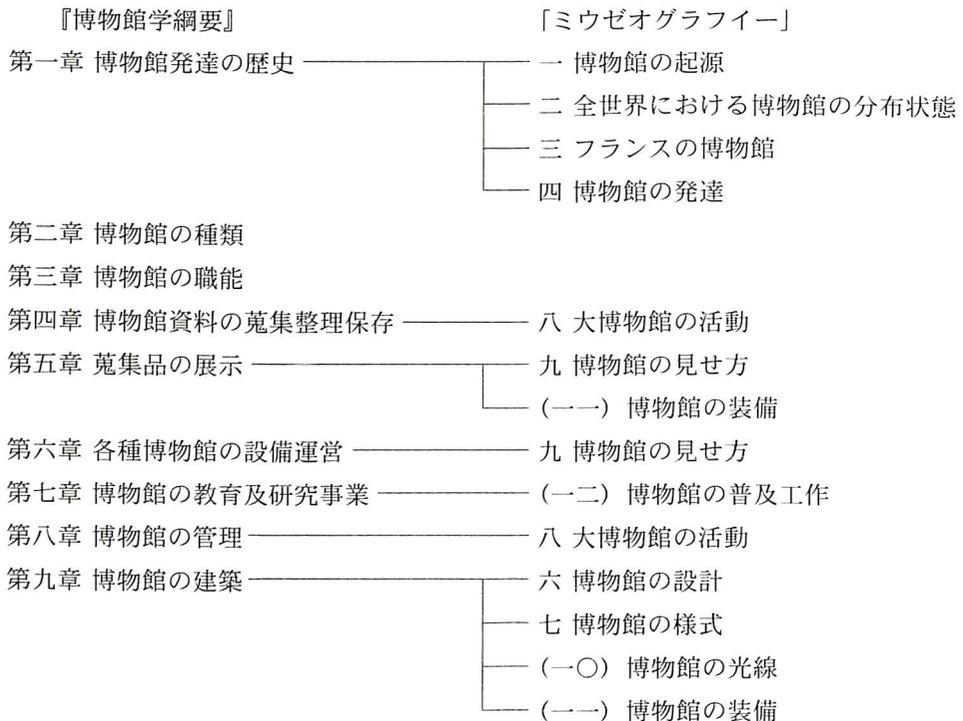
(12) 博物館の普及工作

最後の「普及工作」は、現在の博物館経営論に通じるものである。即ち広報のあり方はもちろん、回数券などの話題、カタログ、そして所謂リピーターをいかに作り出すかを述べ、友の会の存在意義にも言及している。さらには、館での展覧会のみならず、巡回展（または移動展）や「案内人」の必要性を上げて、講演会のほかに音楽会の開催にも触れている。そして最後には陳列品と解説パネルの関係を述べて、展示という博物館本来の意義こそが重要な要素であることを示しており、真摯に本文を終結させようとする姿勢がうかがわれるのである。

3. 『博物館学綱要』との比較

さて、これらの内容を棚橋源太郎の『博物館学綱要』と、章立てにおいて比較してみたい。

『博物館学綱要』の章立てに大森の「ミウゼオグラフィー」がどのように相当するか、筆者なりの判断で当てはめたものが、以下の通りになる。



双方とも博物館の歴史を最初に取り上げていることが共通している。「一 博物館の起源」は明らかに共通するものとして捉えられる。二から四は必ずしも発達史ではなく、世界的状況を数字で見渡すものであるが、内容に若干ながらも史的状況が含まれ、およそ『博物館学綱要』の第一章に相当するものと見ることはできるだろう。

五の「博物館の繁栄」は入場者数を挙げる内容で、相当するものはない。六以降は、必ずしも一つの章が一つの章と対応関係を持つものではなく、分離して相当するものも見られるが、概ね対照したとおりに分けられるものと思われる。なお、『博物館学綱要』の第二章、第三章については、明確な対応関係を見出し難い。

このように見比べてみても、大森「博物館学」は内容的に博物館学の広範囲に及ぶものとして認めることができるのである。そのかわり、大森「博物館学」は合計でも27頁と、分量において不十分さは免れないのである。しかし、それをもって、大森「博物館学」を否定する材料にはならないことも表明しておきたい。

4. 「博物館学」という用語や認識の遡及

前章で見たごとく、論文や書籍等文献のタイトルに「博物館学」が使われたのは、現在では『博物館学綱要』より7年早い、昭和18年（1943）まで遡ることが判明したのだが、これをもって文献名に「博物館学」の用語を使用した最初の例がすべて明らかとなったとは確定できない。しかし、ここに『新美術』の存在が明らかとなることによって、少なくとも博物館学史の1頁を新たに書き加えられたと考えるのである。

ところで、この大森による文章で看過できないのは、「はしがき」にあった博物館学の誕生を1926年に置いていることである。それは、博物館学を体系化したものとしての誕生を意味するのではないと思われるのであり、博物館学の芽生えがいつであるのか、つまり、そのために確認すべき事項として、用語の使用やその認識としての「博物館学」の遡及に課題が残るのである。

日本国内において、現在判明している最古の使用例は、前述したごとく米田耕司氏により明らかにされている。即ち、大正7年（1918）に発行された東京美術学校の『校友会報』で寺崎武男の「美術館に対する理想」という論文の中に、「此点に就いては欧羅巴に於いては最近種々なる研究がおこなはれて今は殆んど博物館学或は美術館学と称する一つの学問になった程研究されて居るのである。其の中最も方法が新しく、且つ活動的に人に十分なる感興と感化とを与える方法は次に述べるような種類の美術館である。」という記述がある。ここに「博物館学」はおろか、「美術館学」という言葉まで出ていることは興味深いものであるが、いずれにしても、学問としての認識がそこにあるのは明らかであろう。したがって、この頃には何らかの形で博物館学の認識が一部にはあったことになるのである。

では、その後昭和に入ってから状況はどのようになっているのか、管見の限りで述べてみたい。なお、この点については以前に簡単に触れたことがあり^(註9)、今回はそれを振り返る形で見ていくこととするものであり、多くは今後の課題であることも明記せざるを得ない。

まず、現在の日本博物館協会の前身である博物館事業促進会の『博物館研究』創刊号（第1巻第1号、昭和3年=1928）に、既に「博物館学」の用語は登場している。一記者の文章になる「博物館従業員の養成」という中に、米国博物館協会の博物館従業員養成の計画の項目として、以下の通り記されている。

- (1) 大学及大学院に於ける博物館学教程の立案に関する研究並に其調査。
- (2) 専門学校研究科に於ける教育、美術、歴史等の諸学科へ、博物館学に関する教材を導き入れるべく努力すること。
- (3) 大学院に博物館学の科目に加設すべく大学と協力すること。
- (4)(5)略
- (6) 博物館学の学生及び徒弟の為めの職業的指導（傍線筆者、以下全て同じ）

続く第1巻第2号では、紹介者は不明ながら「デービッド、マーレー氏の博物館論」の紹介がなされ、「英国博物館学の権威デービッド、マーレー氏」と記されている。さらに第1巻第3号では、團伊能氏の「本邦博物館に関する諸問題」の中に「(前略) 品物の保管法なりに通じた所謂博物館学の専門的智識又経験ある人」とある。

これらが一学問としての「博物館学」を示す使用法であることはほぼ理解できよう。昭和3年の博物館事業促進会発足時には、何らかの意識が博物館界にあったことは間違いなく、その証左と思われるのである。

また、その後も第3巻第12号の「第二回全国公開実物教育機関主任者協議会議事録」における議長・林博太郎伯爵の終わりに当たっての挨拶の中で、「最近の博物館学と云ふやうなものにつきまして多くの意見を発表くださいまして、(後略)」とあるように、明確な意識下で「博物館学」が使用されていることがわかる。「博物学」ではなく、まさしく「博物館学」であると言えるのである。

棚橋源太郎においては、昭和5年（1930）の『眼に訴へる教育機関』で間違いなく意識的に使用していることを確認できる。「博物館従業員養成の必要」なる項目において、

ミュンヘンの大学にはムゼウムス・クンデ（博物館学）の講座があつたと聞く。巴里のルーブル美術館内には博物館員養成の機関がある。亜米利加でもミュージアモロジー（博物館学）といふものは立派な一つの学問になつてゐて、コロンビア大学でも、ハーバード大学でも、各地の大学に博物館員の養成科が設けられて、博物館学の講義や実習が行はれてゐる。日本の大学には図書館学だけは、東京帝大の文学部で和田博士に依つて講義されてゐたけれども、遺憾ながら博物館学を講ずる場所はまだないやうである。博物館事業の健全な発達のため一日も早く日本の大学にこの博物館学の科目を設けたいものである。

とあって、棚橋自身が「博物館学」という用語を使用していることがわかるのである。

『眼に訴へる教育機関』は、まさしく当時の博物館学を大成したものであることは間違いないだろう。しかし、棚橋自身で文献名として取えて使用しなかった「博物館学」であり、当時の学問としての認識を窺わせる一つの事実を示すものなのかもしれないとも思うところである。

このように、昭和初期にはこの「博物館学」という用語が使用されて、その名の下での現在の博物館学に通じる理論形成が行われつつあったことを理解することができるのである。

因みに、『博物館学綱要』の前年（1949）に刊行された木場一夫著の『新しい博物館—その機能と教育活動—』にも「本邦における博物館学の進歩をはかること」（216頁）という記述が見られる。

いずれにしても、昭和初期に意識的な「博物館学」の使用が認められ、それが大正7年にまで遡ることが今のところ判明しているのであり、大森が言う博物館学の誕生が1926年という解釈には疑義を挿まざるを得ない。しかしそれは、洋画家である大森が、博物館学の一研究者としてではなく、洋画家としての外遊の結果からの認識であったことを考えると、致し方ない結果ではないかと思われる。

また参考までに記すと、王宏鈞編の『中国博物館学基礎』^(註10)の中で、1934年の『牛津字典』、つまりオックスフォードの「字典」に「博物館学」が「設置博物館的科學」であるとの記述が見られると紹介されている。1926年よりは遅れる年代ではあるものの、「博物館学」遡及のために辞典を含む海外文献の確認の必要もあることを知るのである。

おわりに

昭和41年（1966）の網干善教の著になる『博物館学』という単行本がある^(註11)。実はこれも意外と博物館学史上には登場しない文献なのであるが、恥ずかしながら、その存在を筆者は最近入手することによって、ようやく知ることとなった。この網干『博物館学』は、仏教大学の通信課程のために編まれたもので、非売品である。そのため、一般の手に渡りづらいということもあったためか、学史からは意外と見放されたものとなってしまったのであろう。

しかし、それ以前に書籍名で「博物館学」を名乗ったものは、昭和25年の『博物館学綱要』と昭和31年の『博物館学入門』（日本博物館協会発行、鶴田總一郎が前編として「博物館学総論」を執筆）だけであると思われる。そして、その後は昭和43年の富士川金二による『博物館学』まで待つことになる、と一般には考えられていた観が強い。しかし、実はその間に網干『博物館学』があったことになる。このように、実はあまり知られないところに「博物館学」が潜んでいる可能性は、まだあるのかもしれない。

昭和50年代になると、『博物館学講座』が刊行されるなど、「博物館学」も本格化する様相になり、学問としての位置を確立していく（表1）。それ以降は、多種多様の文献が世に出されている。しかし、博物館学を一つの学問として真に目指すならば、その存在基盤ができた過程、即ち学史を疎かにしてはならないと強く思うのである。

表1 「博物館学」用語使用文献年表（昭和54年まで）

年	西暦	文献	執筆者名・発行所等
大正7年	1918	『校友会報』	東京美術学校
昭和3年	1928	『博物館研究』	博物館事業促進会（日本博物館協会）
昭和5年	1930	『眼に訴へる教育機関』	棚橋源太郎
昭和18年	1943	「ミウゼオグラフィー—博物館学—」 『新美術』	大森啓助
昭和24年	1949	『新しい博物館—その機能と教育活動—』	木場一夫
昭和25年	1950	『博物館学綱要』	棚橋源太郎
昭和28年	1953	「わたくしの博物館学 —総合展示の原理と発展について—」 『日本博物館協会会報』第16号	新井重三
昭和31年	1956	『博物館学入門』	日本博物館協会
昭和41年	1966	『博物館学』	網干善教
昭和43年	1968	『博物館学』	富士川金二
昭和46年	1971	『改訂増補 博物館学』	富士川金二
昭和52年	1977	『博物館学序論』	加藤有次
昭和53年	1978	『博物館学講座』全10巻（～1981）	雄山閣出版
昭和54年	1979	『博物館学』	倉田公裕

（太字は文献名に「博物館学」が入っているもの、それ以外は文章中に「博物館学」が確認できるもの）

今一度昭和18年の「博物館学」を考えた時、平成19年度から「博物館学」が時限付ききという条件下で、科学研究費の科目として採用されたことに思いが至った。博物館学の学史を今回のように見渡す限り、決して出遅れた学問ではないことは明らかで、少なくとも一学問分野としてこれまで半世紀以上の歴史を持ち、場合によっては100年近くに渡っているとと言えることも改めて確認した次第である。しかし、逆に博物館学の学史そのものを疎かにしてきたため、学問としての存在意義を明確に示し得なかったことにも問題（責任）があるのではないかと考えている。そのため、学史補強のため今後もさまざまな文献を見出す作業に筆者なりに関わっていきたくと考えているし、多くの研究者の参画を期待し、またご教示を願う次第である。

付記

脱稿後、明治末～大正初期の文中用語としての「博物館学」使用例があることを青木豊先生よりご教示頂いた（発見者は青木先生以外とのこと）。いずれも黒板勝美の関連著作である。本稿では用語使用の最古例を米田耕司氏指摘による大正7年の例としたが、用語使用としての「博物館学」遡及がさらに進んだ訳である。黒板関連文献は、いずれ関係者により紹介されるものとうかがっている。本稿は、論文または書籍等の文献タイトルとしての「博物館学」遡及に特に焦点を定めたものであり、また、用語の遡及例発見者に敬意を表する意味で、ここに存在の事実を付記するに留め、本文や付表の改変は一切行わなかった。

註

1. いちいちその誤りを指摘することをここでは避けるが、実際に『博物館学綱要』が「博物館学」使用の最初の例であると記述している文献は、残念ながら近年のものでも見られるのである。
2. 米田耕司 2004 「学芸員をめざす若者へ」『國學院大學博物館学紀要』第28輯 1～2頁 國學院大學博物館学研究室
3. 大森啓助は明治31年（1898）、神戸市に生まれる。本名は大森多満四郎。大正15年（1926）～昭和7年（1932）まで渡欧し、サロン・ドートンヌに出品、入選。帰国後、春陽会賞を受賞し会友となるが、昭和11年（1936）に国画会会員となる。昭和62年（1987）に東京で没。享年89歳。著書に『ヴァン・ゴッホ』『印象派の話』などがある。
4. 全国大学博物館学講座協議会50周年記念事業として編纂された『博物館学文献目録』（全2冊、2007年5月31日発行）においては今回紹介するうちの第2回分のみが掲載されている。実はこの文献目録には筆者の名前も協力者として記されているのだが、この第2回のみ最初に入手した筆者が、その情報を提供したことから当該文献名の掲載であった。第1・3回については、この文献目録が印刷にかかる頃に入手して確認したため、残念ながら掲載は間に合わなかったのである。したがって、やはりこれまで学史上取り上げられることのなかった文献であるのは、ほぼ間違いなからう。
5. ちなみに、いつまで継続した雑誌であったかという点、昭和18年11月号（第28号）をもって廃刊となっている。最終号には次の通り廃刊の知らせが掲載された。

廃刊について

決戦下国内態勢の強化に挙国邁進の際、この国家的要請に遵ひ、我等日本美術雑誌協議会に所属する八誌は、此度情報局の指導幹旋により統合整備する為、十月中発行に係る雑誌を最後として廃刊することとなりました。顧れば昭和十六年七月の統制により、本協議会の結成されて以来二年有余短日月でありましたが各自その全力を以て時の要請に応え皇国美術文化の進展と啓発に微力乍ら尽瘁し得られたることを欣快とするものであります。我等の我美術文化に対する熱意と希願は、続いて創設せらるゝ企業体に於いて継承され、更に強化発揚されるであらうことを確信し、不変のご支援を乞ひ茲に本協議会の解散と所属八誌の廃刊を宣明いたす次第であります。

昭和十八年十月

	日本美術雑誌協議会
国	画 齋田元二郎
新	美 術 大下正男
生	活 美 術 天田文雄
日	本 美 術 石川宰三郎
画	論 藤本韶三
季	刊 美 術 藤森順三
旬	刊 美 術 猪木卓爾
美	術 文化新聞 佐久間善三郎

このように、創刊も廃刊も統制がかけられたものであった。その後、統合された結果として

昭和19年1月3日付けで、新たに『美術』が同じ体裁で創刊されている（日本美術出版社が発行）。

6. シャイヨー宮のことであろうか。

7. 時代部屋とも称されることがある。

青木 豊 2000 「展示の分類と形態」『新版 博物館額講座 第9巻 博物館展示法』雄山閣出版

矢島國雄 1996 「時代室」『博物館額事典』東京堂出版

8. 註7 青木文献参照。

9. 山本哲也 1999 「我が国における博物館経営論の推移」（『國學院大學博物館学紀要』第23輯）の註において記したものである。

10. 王宏鈞編 1990 『中国博物館学基礎』上海古籍出版社

11. 網干善教 1966 『博物館学』仏教大学通信教育部